

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	齋藤 拓也
論文担当者	主査 丸茂 幹雄
	副査 木村 卓
	副査 坂口 太一
学位論文名	Effect of edaravone on symptomatic intracranial hemorrhage in patients with
	acute large vessel occlusion on apixaban for non-valvular atrial fibrillation
	(非弁膜症性心房細動のためアピキサバンを投与した脳主幹動脈急性閉塞症患者における症候性頭蓋内出血に対するエダラボンの効果)
論文審査の結果の要旨	
【背景】フリーラジカルスカベンジャーであるエダラボンは脂質過酸化を抑制する作用を持つ脳保護薬である。エダラボンを投与された脳主幹動脈閉塞（LVO）を伴う急性期脳梗塞患者では、症候性頭蓋内出血（sICH）が少なかったという報告がある。しかし、非弁膜症性心房細動（NVAf）に対して直接抗凝固薬を投与された LVO を伴う急性期脳梗塞患者において、エダラボン投与による sICH 抑制効果については十分に検討されていない。そこで今回 NVAf に対してアピキサバンを投与された LVO を伴う急性期脳梗塞患者において、エダラボン投与と sICH 発症の関連を検討した。 【方法】本研究は ALVO study のサブ解析である。ALVO study は日本における多施設研究であり、発症 24 時間以内に入院した LVO または脳主幹動脈狭窄を伴う急性期脳梗塞患者のうち、14 日以内にアピキサバンが投与された患者が登録されている。ALVO study 登録患者のうち、LVO を伴う急性期脳梗塞患者を対象とし、エダラボン投与の有無で、エダラボン群と非エダラボン群の 2 群に分けた。脳梗塞発症後 1 年以内の sICH の発症率、アピキサバン投与までの脳梗塞拡大の有無を 2 群間で比較した。 【結果】ALVO study 登録患者 686 例のうち、対象 622 例であり、407 例（65.4%）にエダラボンが投与された。エダラボン群、非エダラボン群の 1 年以内の sICH 発症率は、それぞれ 1.3%、5.0% であり ($p = 0.01$)、エダラボン群の非エダラボン群に対する Inverse probability of treatment-weighting (IPTW) 法によるハザード比は 0.36(95%信頼区間 0.15-0.80)だった。 【結論】NVAf に対してアピキサバンを投与された LVO を伴う急性期脳梗塞患者において、エダラボンが投与された患者では、sICH 発症が少なかった。 本研究は当該分野の臨床上遭遇する問題点の検討に有意義な研究であり、学位に値すると評価した。	